

「じゃあ、そんなわけだから美奈ちゃんのことお願いね」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。お願いって言っても……!」

「どうせ一人暮らしで彼女もいないんでしょ？ だったら別にいいじゃない。仕事も今は家でやってみただし」

と、俺は実の母親と電話越しにそんなやり取りをしていた。

話の内容を要約するところだ。

俺の親戚に、美奈ちゃんと言う女の子がいる。俺とは結構年が離れていて、今年で確か小学四年生ぐらいだったと思う。

そんな美奈ちゃんの両親が仕事の都合で海外に行かなければならぬらしく、本来ならば美奈ちゃんを連れて行く予定だったのだが本人がとても嫌がったのだそう。

なので何とか親戚である俺の家族に預けようとしたのだが、うちの両親も運悪く何かと忙しいらしい。

そこで白羽の矢が当たったのが俺と言うわけだ。

俺は今、そこそこ田舎の平屋で一人暮らしをしている。所謂地方都市の外れの方で、車がなければ移動は不便だが住んでみれば割と暮らしやすい。

そして仕事は在宅勤務、だと言うことで母親は俺に彼女の両親が帰ってくるまでの間、美

奈ちゃんの面倒を見させようと言うことらしい。

ちなみに今の時期は夏真っ盛り。恐らくは美奈ちゃんも数日前に夏休みに入ったばかりだろう。

「普通は夏休みを外国で過ごすなんて聞いたら、喜んでいきそうもんだけどな」

「美奈ちゃんは大人しいからねえ。昔から怖がりだったし、ほら。あんたと一緒に夜道を歩いてたら、野良犬にびっくりしてお漏らししちゃったこともあったでしょ」

などと、懐かしそうに母親は昔の思い出を語る。子供のころのそう言った話はあまり長く覚えていると、本人が嫌がるから早く忘れてやった方がいい。

「それに、元々あんたの所に遊びに行きたがってたみたいだよ」

「え？ 俺のところ？」

「そうそう。昔っからあんたに懐いてたじゃない、だから夏休みを使って遊びに行こうと思ってたところに、外国に行くって話が出たから」

美奈ちゃんからすれば、予定を崩された挙句に知らないところに連れて行かれそうになったってことか。確かにそれは多少気の毒に思わなくもない。

それにしても美奈ちゃんが俺の家に遊びに来たがっていたことは素直に嬉しい。確かに会うたびに懐いてくれているが、そんなにまでとは思っていなかった。

……嬉しいは嬉しいのだが、一つ大きな問題がある。それに付いては後で語ることにするが。

「だからいいでしょ？　って言うか、拒否権ないわよ。だって美奈ちゃん、もう行く気満々で準備してららしいからね」

「……まあ、だよなあ」

話の流れからしてそうだろう。今更俺が拒否しても、両親は飛行機のチケットを二人分で取ってあるだろうし。

「じゃあ決まりね。明日、美奈ちゃんを駅まで迎えに行つてあげなよ」

どうやら電車に乗るところまでは彼女の両親と一緒に来るとのことらしい。そこで一人で電車に乗って、俺の住む町までやってくると言うわけだ。

四年生の女の子からしたらちょっとした冒険だろう。

「つて、明日かよ！」

話が出るのも急なら、来るのもいきなりだな。

こっちの予定つてもものも多少は考えてほしいもんだ。いや、予定なんかないんだけど。

「どうせ暇なんだろう？」

「そ、それは……」

流石に付き合いの長い母親だ。当然そのことも見抜かれていた。

「美奈ちゃんのご飯代は、ちゃんと振り込んでおくから。姉さんもあなたに迷惑かけるからって、結構な額をくれたからね」

「ん、まあ、そう言うことなら」

一応、金が目が眩んだことにしておく。

その後は少し世間話をして、母親からの電話を切った。

携帯をテーブルの上に置いて、俺はクッションに腰掛けて唸った。

「美奈ちゃんがくるのか」

頭を抱える。

嫌ではない。何故なら美奈ちゃんは超絶美少女で、まるでアイドルのような見た目をしている。

性格は少し引っ込み思案だが、自分の気持ちはちゃんと口にするし、そのうえでしっかりとしたいい子だった記憶もある。

彼女には問題はない。彼女には。

そう、問題があるとすればそれは俺にだった。

何を隠そう、俺はロリコンなのだ。それも重度の。

何とか隠して生活しているのだが、正直なところ家の外を歩く女子小学生を観察したことは一度や二度ではない。

割と地方と言うこともあって警戒されていないので、夏は公園やプールで薄着の女兒を眺めるのが一つの楽しみになっているレベルのどうしようもなさだ。

なので部屋には大量のロリ系のエロ本があるし、おかげも当然ジュニアアイドルの動画だ。

そのぐらいの筋金入りのロリコンである俺の家に、小学四年生の美少女。

正直我慢できる気がしない。

実際昔美奈ちゃんが遊びに来た時も、自分の理性を総動員して勃起を抑えるので必死だったのだ。

「参ったなあ」

口ではそう言いつつも俺の顔はにやけていた。

当たり前だろう。ロリコンである俺が、懐いてくれている美少女とひと夏を過ごすことができるのだ。

理性が持つ自信はないが、こうなったら開き直りだ。

なんとしてでも美奈ちゃんと夏の思い出を作る。そう考えればこれからの日々が楽し

で仕方がなくなってくる。

既に明日からのことを思うだけで、俺の愚息は固く勃起していた。

——取り敢えず、今日は入念に五回は抜いておくとしよう。

翌日、俺は車を走らせて最寄り駅までやってきていた。

指定された時間ぴったりに、駅のロータリーに車を停車させる。フロントガラス越しに辺りを見てみると、ちょうど駅から見知った姿が出てきたところだった。

その姿を見て、年甲斐もなく俺の心臓が高鳴った。

「美奈ちゃん、可愛すぎだろ……」

田舎とは言えここは駅だ。美奈ちゃん以外にも大勢の女の子がいる。

その中でも彼女の可愛さは、群を抜いていた。

整った目鼻立ち、幼さを強調するようなツインテールの黒髪。身長は百三十センチには届いていないみたいで、同年代と比べても少し小柄に見える。勿論成人男性の俺と並べば、その差は圧倒的だ。

ミニスカートの白いワンピースを着た彼女は、まさに天使と呼んでも過言ではないぐらいの可愛さを放っていた。

きよろきよろを辺りを見ながら歩いてくる美奈ちゃんに、窓を開けて声を掛ける。

「美奈ちゃん！」

俺の声に気付いた美奈ちゃんは、不安そうな表情をパッと明るくさせながらこっちに向かって小走りで歩いてきた。

「お兄さん！」

「久しぶり。取り敢えず乗って」

あまりここに長く車を止めてはいけない。

美奈ちゃんを助手席に乗せると、彼女がシートベルトをしたのを確認してから俺は車を走らせた。

「お久しぶりです、お兄さん」

丁寧にぺこりと頭を下げる美奈ちゃん。こういうところも可愛らしい。

「そうだね。二年ぶりぐらい？」

「はい。去年は会えなくて寂しかったです」

なんて可愛いことを言ってくれるんだこの子は。

ちらりと視線を向ければ、ミニスカートから覗く少し日焼けした、幼い女の子の細い足が眩しく煌めいている。

「迷惑をかけてごめんなさい」

「いいっていいって。最初から俺のうちに来たかったんでしょ？」

「は、はい。本当は夏休みの宿題を終わらせてから連絡したかったんですけど」

「そうなんだ。ちよつと早まっちゃったけど、その分一緒に過ごせる時間が長くなったからよかったよ」

「は、はい！ わたしものです！」

それから適当に雑談をしながら、まずは俺の家へと車を走らせる。

その途中も美奈ちゃんの足やほんの少しだけ膨らんでいる胸元などをチラチラとみては、俺は自分の欲望を満足させていた。

それから俺達は適当なファミリーストランで昼食を摂って、自宅へと戻った。

俺の家は庭付き、駐車場有の和風建築の一軒家。

これもまた別の親戚が住めなくなつたところを、俺が引き取ってリフォームしたものだ。車を止めて降りると、恐らくは平屋を始めてみたのだろう。庭に立った美奈ちゃんは興味津々に俺の家を眺めている。

「見た目は古いけど、ちゃんと中身は新しくしてあるから」

「えっと、あの、素敵なお家だなーって思ってた……」

この年でもうお世辞が言えるとは、やっぱり育ちがいい子は違うなあ。

玄関をくぐり、家の中へと入る。どうやらガラガラとなる引き戸もテレビでしか見たことがないようで、美奈ちゃんはそれにすらも感動を覚えていた。

「ふー……」

居間に到着し、冷房をつけて一息を吐く。

テレビと言うものを見なくなつて久しく、ローテーブルの上に乗っているノートパソコンがその代用品だ。大抵の娯楽はこれと携帯で完結するようになっていた。

「取り敢えず麦茶でも入れるよ。動画でも見る？」

「あ、いえ」

そう言つて俺はノートパソコンの電源を入れようとするが、美奈ちゃんはそれを止めた。「最初に夏休みの宿題を……その、ママからお兄ちゃんと遊ぶのは勉強した後にしなさいって……」

「そうなんだ。それじゃあ、そこ使つていいからね」

ノートパソコンを避けてあげると、美奈ちゃんは持ってきた荷物から夏休みの宿題と筆

記用具を取り出す。キャラクターもののイラストが付いた、女の子らしい可愛い筆箱が実に彼女らしい。

「じゃあ麦茶でも入れるか」

「はい。あの、ごめんなさい。来てすぐに……」

「いやいや、いいんだよ。それよりさっさと終わらせて、思いっきり遊ぼうね」

「……はい！」

俺は麦茶を入れてあげてから、彼女の正面に座って宿題をやっている姿を観察していた。どうやら美奈ちゃんはそれなりに勉強もできるようで、しっかり集中しながら取り組んでいる。

そのため身体は完全に無防備で、ノースリーブから覗くつるつると腋やらちよつと視線を下げると見える、日焼けした太もも。目を凝らさなければわからないほんの僅かな胸の膨らみなどを存分に堪能すること came。

どうやって美奈ちゃんを見ていると、ふと手が止まっていることに気が付いた。最初は割と順調に進んでいたのに、どういふことだろうか。

「どうしたの、美奈ちゃん？ わからないところでもあった？」

「えっと、あの……お兄さん、退屈じゃないですか？」

「まあ、退屈って言えば退屈だけど……」

そうは言うものの、美奈ちゃんを目で犯しているだけで充分過ぎるぐらいだった。むしろこのまま、何時間でも見ていたいぐらいだ。

「なんか、その……折角お兄さんのお家に来たのに、宿題やらなくちゃいけないのが……えっと」

「集中できないんだ？」

こくりと恥ずかしそうに頷く。

そんな仕事も可愛らしいが、別に恥じるべきことじゃない。むしろ俺からすれば、それだけここに来るのを楽しみにしてくれて嬉しい限りだ。

実際別に宿題なんて後回しにして遊びに行ってもいいのだが、恐らくそれでは真面目な美奈ちゃんは罪悪感を抱くだろう。

どうしたものかと思案すると、すぐにいいアイデアが浮かんだ。

「じゃあ、宿題もゲーム感覚で楽しんじゃう？」

「宿題を……ゲーム……？」

「そうそう。美奈ちゃんが問題を解くでしょ？ それを俺が答え合わせする。全問正解してたらご褒美で、間違ったら罰ゲーム」

「面白そうです！」

俺と一緒に何かができるだけで嬉しいのだろう。美奈ちゃんはすぐにそれに飛びついてきた。

ある程度の区間を決めて、そこを解くたびに答え合わせをする。幸い夏休みの宿題は大間で分かれているのでわかりやすかった。

「できました！」

「お、早いね」

テキストを受け取り、一緒についている解答を見ながら丸を付けていく。

やっぱり美奈ちゃんは頭がいいみたいで、全問正解だった。

「全問正解、おめでとう！ それじゃあご褒美だね」

「わーい！」

無邪気に喜ぶ美奈ちゃん。

「じゃあ何がいいかな？ 晩御飯を何処かに食べに行くとか……」

「あ、あの……」

おずおずと、美奈ちゃんが切り出してくる。

「正解したら、頭撫でてほしい……です」

などと、顔を赤くしながら言ってきた。

なんて可愛い子なんだ。こんな美少女が、頭を撫でてほしいだなんて。

別にご褒美じゃなくてもいつでもしてあげるのだが、ここは素直に彼女の言うことに従っておくことにする。

「いいよ」

手を伸ばして、美奈ちゃんの髪の毛を撫でる。

思った通りサラサラで、指の通りがとてもいい。どんな高級シャンプーを使ったとしてもこのころの女の子の艶と手触りを生み出すことはできないだろう。

気持ちよさげに目を細めていた美奈ちゃんをずっと見ていたいが、このままと言うわけにはいかない。何せ俺の目的は、ご褒美ではなく罰ゲームの方にあるのだから。

「はい、お終い」

「……あ」

名残惜しそうに、美奈ちゃんがかっちを見上げてくる。

そんな目で見られるのもっとしてあげたくなくなるけど、今は我慢だ。後で幾らでもしてあげればいいのだから。

「もっといっぱい正解すれば、沢山撫でてあげるよ」

などと彼女をその気にさせる言葉をかけて、次の問題に取り掛からせる。

「あー、ここ間違ってるね」

「そんなあ……」

焦りが生まれたのか、美奈ちゃんは目に見えて肩を落とす。

次の大問を解かせたところ、焦ってしまったのかそれとも純粋なミスなのか、一問間違えてしまっていた。

「それじゃあ、罰ゲームだね」

俺は立ち上がって、美奈ちゃんの背後に回る。

これが成功するかどうかは一種の賭けだったが、彼女の俺に対する好感度からしても勝算は高い。何よりもさっきのご褒美で、ほぼ勝利を確信していた。

「お兄さん……？ きゃっ」

可愛い悲鳴を上げて、美奈ちゃんが硬直する。

俺は彼女の細いお腹を両手で掴んで、持ち上げていた。

放してあげる。

美奈ちゃんの顔は真っ赤に上気して、笑い過ぎたのか目尻に涙が浮かんでいた。その姿がなんとも官能的で、俺の股間はもうはち切れそうなほどに硬くなっている。

「じゃ、じゃあ……宿題の続きしますね」

どことなく名残惜しそうに、美奈ちゃんが宿題に取り掛かっていく。

「できました！」

また数分後、答え合わせをする。

「今度は二問間違えてるね」

「え？ そんなあ……」

「じゃあまた罰ゲームをしないとね」

俺は手をワキワキさせながら美奈ちゃんに近づいていく。

「きやー！」

彼女もノリノリでそれを受け入れようとしていた。

そこでふと、俺はあることを思いつく。

くすぐりが許されるのなら、もっと過激なことをしても大丈夫なのではないだろうか。

そこに根拠はない、単純に俺の我慢の限界が近づいているだけだ。

「うーん、くすぐりだけじゃちょっと弱いかなあ」

「じゃあ何するんですか？」

「一回間違えることに一枚服を脱ぐってのはどうかな？」

「え？　は、恥ずかしいです……」

美奈ちゃんの顔は真っ赤だ。でも、嫌がっていると言った感じではない。単純に、恥ずかしくているだけのようだ。

「でもちょっと嫌なことじゃないと、罰ゲームにならないよね。美奈ちゃん、くすぐられても喜んでたし」

「そ、それは……」

どうやら思い当たる節があったようだ。さっきのくすぐりでは、美奈ちゃんは嫌がるどころか楽しんでいた。勿論それ自体は俺にとって嬉しいことなのだが。

それを逆手にとって、交渉してみることにする。

「……うー……わかりましたあ」

洪々と美奈ちゃんがワンピースに手を掛ける。

「で、でもお……」

涙目になってこっちを見ている。やっぱり恥ずかしいらしい。

その姿が可愛くて、俺はもっと意地悪をしてあげたくなってきた。

「でもじゃなくて、ほら。手伝ってあげようか？」

ワンピースに手を掛ける。

「はい、肩のところから手を抜いて」

「うう……」

僅かに抵抗しながらも、美奈ちゃんは俺の言うことには逆らわなかった。

両腕を肩の部分から外して、そのまま万歳させる。

ワンピースを持ち上げて脱がすと、思った通り美奈ちゃんはブラジャーをしていなかった。

ほんのりとした日焼け跡が眩しい、少しだけふっくらとしたおっぱいが俺の目の前に現れる。

小学四年生の、本当に僅かに成長を感じさせる膨らみのおっぱいは、この上なく俺の興奮を高めていく。

その先端には薄桃色の乳首が付いていて、その小さい控えめさもまた彼女の性格を表しているようで微笑ましかった。

下半身はワンピースに合わせた白いパンツを履いていて、最後の聖域を守っている。

胸だけではなく、剥き出しになったお腹や腋、太ももにおへそ。小学四年生の身体のあらゆる部分に、俺の視線が絡みついている。

「お兄さん……」

両手で胸を隠しながら、美奈ちゃんが恥ずかしそうに身を振った。

「ほら、勉強の続き」

鉛筆を持たせ、テキストに向かわせる。

美奈ちゃんは一見すると真剣に問題を解いているようにも見えるが、顔は真っ赤だしその手先は小さく震えていた。

俺はこのままではいけないと、美奈ちゃんの背後に再び座る。

「美奈ちゃん、どうしたの？」

「は、恥ずかしいです……」

「でも罰ゲームだからね」

「うう……」

顔を伏せる美奈ちゃん。

「ほら、ちゃんと宿題しないと駄目だよ」

「やっ、お兄さん……っ!」

ふにっとした柔らかい感触が、俺の掌に伝わってくる。

俺の右手が、美奈ちゃんの可愛らしいおっぱいに触れて、軽く揉んでいた。

小学生のおっぱいは小さいが、それでも確かな柔らかさがある。むしろすべすべの肌の感触と強く押し返してくる弾力のおかげで、下手な巨乳なんかよりもずっと揉み心地がいい。……多分、それは俺がロリコンだからなのだろうが。

「お兄さん、だめっ……」

「これも罰ゲームだよ。手を止めたら、美奈ちゃんの恥ずかしいところを触っちゃうからね」

「うう……」

涙目になりながら、美奈ちゃんは手を動かし始める。

それでもやはり恥ずかしいのか、それとも問題に詰まっているのか、時折手が止まるたびに俺は片手だけでなく、両手で美奈ちゃんの胸を包んで柔らかく揉みしだいた。

「ふうっ、んっ♡」

「美奈ちゃん？」

「な、なんでも……ない、です」

消え入りそうな声で、美奈ちゃんが答える。

これは完全に俺が触りたくてやっているだけの行為なのだが、ひょっとしたら気持ちいいのだろうか。

「ねえ美奈ちゃん」

「な、なんです……ひんっ♡」

指先で軽く乳首を弾くと、美奈ちゃんは色っぽい声と共に身体をくねらせた。

「本当に嫌なら、罰ゲームやめるけど、どうする？」

「ば、罰ゲームだから……我慢します……」

「はい。よく言えたね」

美奈ちゃんの頭を撫でてあげると、それだけで彼女は夢見心地になっていた。

それからしばらくの間、俺は後ろで美奈ちゃんの勉強を見ている。

勿論手が止まるたびに、軽く胸を揉んだり乳首を弄ったりして性感を与えてあげること
も忘れてはいない。

「ひんっ♡ お、お兄さん……なんか、美奈の身体変ですう」

「何処が？」

指で乳首を摘まむと、美奈ちゃんはびくんっ、と大きく身体を跳ねさせた。

「ひいんっ♡ な、なんかお兄さんに胸触られると、熱くなってきて……身体もびくんっ

てなっちゃいます……」

「そうみたいだね。ひよっとして、こういうのって初めて？」

「は、初めて……？ は、はい」

消え入りそうな声で、美奈ちゃんがそう返事をする。

ひよっとしたら彼女は、まだ性的な知識がないのかも知れないと、そんなことも思った。

「美奈ちゃん、学校で性教育って習った？」

「せ、せいきょうい……？」

どうやら本当にまだその手のことは学んでいないらしい。つまりは美奈ちゃんは今の自分の身体に起こっていることも理解していないと言うことだ。

「大丈夫だよ。美奈ちゃんの身体がびくってするのは、自然なことなんだ」

「そ、そうなんですか……？ んんっ♡」

ふにふにと胸を揉みしだくと、美奈ちゃんは無意識に甘い声をあげた。

「そっだよ。嫌な感じ？」

美奈ちゃんは首を横に振る。

嫌と言うよりは、未知の感覚と恥ずかしさによるところが大きいのだろう。

そんなことをしているうちに、いつの間にか美奈ちゃんの宿題は一段落ついていた。

もう少し悪戯して遊びたいところだが、折角来てくれたのに勉強ばかりをやらせるのも可哀想だろう。

子供なのだから、やはり思いっきり遊んでもらいたい。勿論美奈ちゃんにもっとエッチなことをしたくはあるが、それと同じぐらい楽しんでもらうのも大切だ。

「あ、あの、もう服……着ていいですか？」

「ああ、いいよ。罰ゲーム、どうだった？」

「……な、なんか不思議な感覚で。びくってして、ちょっと怖かったけど」

美奈ちゃんはワンピースを着ながら、軽く自分の胸の辺りに触れてみる。

どうやら俺が触ってあげたときのような感覚がなくて、不思議そうにしているようだった。

「また間違えたら、罰ゲームありで宿題しよっか？」

俺がそう尋ねると、美奈ちゃんはやや控えめながらも確かに頷くのだった。

それから数時間後、夕飯を食べた後俺は少し片づけなければならぬ仕事があって、部

屋にこもることになった。

その間美奈ちゃんには居間のノートパソコンを自由に使って、動画を見ててもゲームをしてもいいと言っておいたので、退屈させていると言うことはないだろう。

一仕事を終えて、身体を伸ばす。そう言えばお風呂を汲んでいなかったことに気付いて、今を通り過ぎて風呂場へと向かっていった。

我が家の風呂は見た目こそ古風な木造風呂だが、ちゃんとリフォームはしてある。何とか頑張って見た目はそのままに、中身は新しくしたというわけだ。

確か風呂掃除は今朝のうちに済ませておいたので、風呂を汲むボタンだけを押し居間へと向かっていく。あわよくば、美奈ちゃんと一緒にお風呂に入りたいなどと考えながら。

居間と廊下を隔てる戸の前に立って、俺はようやく違和感に気が付いた。

元々大人しい美奈ちゃんだが、動画なりなんなりを見ていれば音が漏れてくるはずだ。しかし、先ほどここを通った時にも何の音も聞こえてこなかった。

ひょっとしたら真面目な美奈ちゃんのことだから、宿題をしているのかも知れない。だとしたらまた罰ゲームができるなどと心を躍らせながら、戸を開いた。

「美奈ちゃ……」

声を掛けようとして、途中で言葉を止める。

どうやら待たせすぎてしまったようで、美奈ちゃんは背もたれを倒した座椅子の上で、クッションを枕にして俯せになって眠り込んでいた。

「晩御飯も食べて、お腹いっぱいだったしなあ」

お風呂が沸くまでは寝かせておいてあげてもいいだろう。

俺は音を立てないように腰掛けて、ノートパソコンで美奈ちゃんが見ていた動画をチェックする。

やっぱり年相応らしくアニメや人気のクリエーターの動画を見ていたようだった。

ふと横を見ると、美奈ちゃんのワンピースのスカートの裾が捲れていることに気が付いた。

ごくりと、唾を飲む。

そこから見える少し日に焼けた太ももがあまりにも眩しくて、目を離すことができない。そもそもさつきから美奈ちゃんの身体に散々触れていながら俺は一度も射精をしていない。ずっと我慢している状態だった。

「美奈ちゃん？」

呼びかけても答えはなく、可愛らしい寝息だけが聞こえてくる。

ノートパソコンの電源を落とす。

意を決して美奈ちゃんの足元に近づくと、そのふくらはぎから太ももに軽く触れた。柔らかく張りのある、小学生女兒の身体。

その感触が手から伝わってきて、俺のちんこはズボンの中で一気にいきり立った。そのまま何度も、起きないように優しく太ももをマッサージしていく。

「……ん」

そのたびに美奈ちゃんはぴくんと身体を震わせていた。

「そう言えば、さっきも少し感じてたよな」

おっぱいやお腹に触れたとき、美奈ちゃんは確かに気持ちよさそうにしていた。

どうやら彼女にはまだ性知識は殆どないようで、自分に何が起こったのかも理解はしていないようだが、身体の方は確実に女になってきているのだろう。

そう思うと、より興奮が増してくる。

起こさないように慎重に、スカートを捲っていく。

ミニスカートだったことが幸いして、すぐに美奈ちゃんのお尻とそれを包む可愛らしい白い下着が露になった。

「み、美奈ちゃんのお尻……」

その小ぶりの白桃のようなお尻はとても魅力的で、思わずしゃぶりたい衝動にから

れたが、そんなことをしては全て台無しになってしまう。

慎重に事を運ぶべきと判断して、両手でパンツの上から美奈ちゃんのお尻に触れる。

「おお……」

溜息が出るほどの柔らかさと弾力。

言葉では表現できないほどの温かさと柔軟さを持った極上のお尻の肉の感触が、俺の手を通して脳と股間に伝わってくる。

「こ、こんな可愛いお尻なら、触らない方が失礼だよな」

などとわけのわからないことを言いながら、俺は夢中になって美奈ちゃんのお尻を揉み続けた。

「ん……ふぁ……♡」

またびくと、身体が動いた。

やっぱり感じているようで、美奈ちゃんの顔を見ればほんの少し息も荒くなっている。

「お、にいさん……」

どうやら俺のことを夢に見ているようだった。

そのまましばらく揉んだり触れたりを繰り返していると、美奈ちゃんの身体に異変が起きていることに気付く。

パンツのクロッチ部分の色が濃くなっている。

「……濡れてる……」

軽く触れてみると、しっとりとした感触が返ってくる。

どうやら俺にお尻を揉まれて、美奈ちゃんはおまんこを濡らしてしまったようだった。その事実は俺に更なる興奮を与え、もう我慢できそうになかった。

既に俺の下着の中は先走り汁で濡れ、少しの刺激で射精しそうなほどに興奮している。

「美奈ちゃん……もうちょっと寝ててね」

ファスナーを下ろし、ズボンを下げる。

そのまま下着も下にずらすと、俺のちんぼがぼろんと零れ出た。

血管の浮かんだ、赤黒いグロテスクなちんぼ。

それはまるで目の前で眠っている天使のような美少女を捕食しようとするモンスターのようでもあった。

「美奈ちゃん、こんな可愛いお尻をしている美奈ちゃんが悪いんだぞ」

俺は体重を掛けないように、美奈ちゃんに覆いかぶさっていく。

そのままパンツのお尻の間の部分にちんぼの先端を擦り付け始めた。

乾いた摩擦音は、すぐに俺のちんこからの先走り汁によって、粘着質な水音へと変わっ

ていく。

「ああ……美奈ちゃんのお尻、弾力が凄い……手で触るより直接、感触がきて……！」

お尻の柔らかさと、パンツの布の感触。

その二つの攻撃によって、俺のちんぽはすぐに発射体制に入っていく。

できるだけ我慢してこの快感を長引かせたいと言う思考と、早く射精しなければ美奈ちゃんが起きてしまうと言う葛藤が俺に強い快感をもたらしていく。

「美奈ちゃん、美奈ちゃん……！」
にちゅ、くちゅ、くちゅ……。

静かな部屋の中に俺の声と水音、そして微かに美奈ちゃんの寝息が響く。

次第に速度を早くして、亀頭の部分で何度も彼女のお尻のワレメを擦り上げていく。

本当ならこのまま尻肉の間に挟んでみたいのだが、下着の布に邪魔されてそれはできそうにない。

「うっ……そろそろ、やばい……！」

金玉の中で先ほどから大量に生成された精子が、俺の尿道に詰まる勢いでせり上がってきている。

「美奈ちゃん……出るっ……！」

びゅるるるるっ！　びゅうううううううううっ！　どくっ、どくう！

「おおおおおおっ……！　すっげえ出る……！」

びゅくんっ！　びゅうううううううううううううっ！

目の前がちかちかする。

頭が真っ白になり、俺は一瞬何も考えることができなくなっていた。

美奈ちゃんのお尻に強くちんぽを擦り付け、そのまま先端から大量の精液を吐き出していく。

ドバドバととんでもない量の精子が尿道から溢れ、その濃さも量も一人でオナニーをしているときの比ではない。

美奈ちゃんのパンツとお尻全体に飛び散り、俺の特濃の精液は彼女の肌や下着に沁み込んでいった。

「う……ふう……」

ようやく射精が止まった。

美奈ちゃんのお尻は見るも無残なほどに、俺の汚い白濁液によって汚されている。

その背徳感、綺麗な女の子を汚してやったと言う薄暗い快感により、俺のちんこはまだ萎えることを知らなかった。

しかし、このまま行為を続けるわけにもいかない。
それにそろそろお風呂も沸いたはずだし、俺はティッシュで美奈ちゃんに付いた精液を拭き取ると、彼女を優しく起こしてあげるのだった。